

吉林大学での一年

李 冬 木

まえがき

2019年4月1日から2020年4月7日まで、私は吉林大学文学部で1年間の海外研修生活を過ごした。研修計画に寄せられた課題を無事に遂行し、多くの大学や研究機関を訪問し、関連分野の学者と広範な学術交流を行い、また、生活者として30年余りの中国国内の日常生活を実際に体験し、現在の中国を実際に知ることができた。ですから、私にとっては、とても充実した一年であった。今回の海外研修の機会をくださった佛教大学、私を受け入れてくださった吉林大学文学部と指導教授の劉中樹先生、これまで公私両面で支えてくださった佛教大学中国学科の同僚と関係部門の皆様にごことよりお礼を申し上げます。

予定として3月31日に帰国すべきであったが、新型コロナウイルス感染症の影響で日本帰国の便が何度もキャンセルされ、紆余曲折したあと、やっと4月7日に上海発、関西空港行きの便に乗ることができた。それは4月中、中国から関西行きの最終便であった。日本国内にも、すでに非常事態を宣言して、最も厳しい入国制限を実施している。これこそ、この一年間、私が経験した最大の「事件」と言える。この間、田中典彦学長、原清治副学長からのご配慮とご指示、学術支援課の岸田稔穂子さんからの最大限のご支援、出発する際、吉林大学文学部および友人の方々からの便宜を提供くださったおかげで、無事に帰国と入国ができた。ここに感謝いたします。

余談であるが、入国2日目に入国審査官から電話があり、昨日の検査結果が「陰性」であったことを告げられ、それから2週間、毎日午前10:00に区役所から「体温チェック」の電話があった。自分も三週間以上、佛教大学の「健康状態管理表」に体温を記録しつづいていた。これは中国のコミュニティのやり方と全く同じである。これまで私は長春市のコミュニティで6週間連続

して体温を報告するよう求められていた。結果としてよかった。8週間の体温は35.8-36.7度を保っていた。以来、今までずっと「蝸牛居」といわれたように、外出を控えてインターネットを介して仕事をしている。おそらくほとんどの人と変わらず、新型コロナウイルス感染症年の生活が続いている。

1. 研修の目的と成果

今回の海外研修の拠点として吉林大学文学部を選んだのは、この大学と文学部との縁が深いからである。まず、吉林大学は私の母校で、文学院は2005年から佛教大学と交流協定を締結する教育機関である。佛教大学「中国語現地研修A」と「中国語現地研修B」の長期留学科目は、毎年吉林大学文学部傘下の「国際語言学院」で実施されており、これまでに留学した佛教大学の学生は延べ400人を超えている。この15年間、私は箇別の情況を除いて、ほとんど毎年、引率教員として学生を吉林大学に連れて行った。今回の研修の直接の目的について言えば、「魯迅と明治日本」というテーマについて、吉林大学文学部の学者を含む中国の学者ともっと広範で深く交流したいと思ったからである。

約35年前、劉柏清先生（1924-2016）をはじめとする吉林大学中文系（現在の文学院）の学者たちは「魯迅と日本文学」という題目の研究を始め、中国近代文学研究の新しい分野を切り開いた。以来、この分野の研究は多方面にわたって展開され、中国現代文学の研究分野だけにとどまらず、中日近代文学、思想および比較文化分野にも深遠な影響を与えている。私は1983年から1986年まで吉林大学大学院で勉強し、この課題に興味を持ち始めた。特にここ十数年、研究重点を「魯迅と明治日本」に置いている。今回の海外研修により、吉林大学文学部から提供された研究室を拠点としておこなった交流活動と主な研究成果は次の通りである。

23ヶ所の大学と研究機関を訪問し、吉林大学の学者を含む80名近い学者と交流を行い、27回の講座と学術シンポジウムの発表を行い、魯迅研究の専門書2冊を出版し、論文1本を書いて刊行した。詳細は後ろに添付される「李冬木海外研修報告書」をご覧ください。

2. 吉林大学、文学院及び長春での学術活動

吉林大学は1946年に創立、中国教育部直属の現在全国最大規模の重点総合大学であり、哲学、経済学、教育学、法学、文学、歴史学、理学、工学、农学、医学、管理学、芸術など12大ジャンルをカバーする50の学部、141の本科生専攻コース、63の一級修士学位授権点、49の一級学科の博士学位授権点、2つの交差学科の博士授権点、44のポストドクター研究ステーションを有する。教師6618人（うち教授2383人）、全日制在學生72018人、そのうち、本科生41765人、専門生796人、予科生132人、修士生19320人、博士課程生8420人、留學生1585人（現在）が在學している。

吉林大学は吉林省長春市にあり、キャンパス面積は611万平方メートル、7つのキャンパスが長春市の各地にあり、「美しい長春市は吉林大学のキャンパス内にある」という説がある。また、広東省珠海市には敷地面積310万平方メートルの「珠海キャンパス」がある。学校図書館の各種蔵書は791万冊で、ユネスコが指定した世界的な蔵書館であり、「中国高等教育文献保障システム（CALIS）」の東北地区センターでもある。

吉林大学文学院は「前進校区」（前進キャンパス）の東榮大厦（東榮ビル）内にあり、このビルの10階と11階は文学院の専属フロアで、事務室と会議室などはこの2つのフロアに集中している。文学院は吉林大学の50学部の一つであるが、その規模はかなり大きく、中国語文学系、歴史系、新聞系、広告系、放送司会と映画プロデューサー系、国際語学院、大学語文教研部を有し、吉林大学の中で学科数が最も多い学部である。教員169人、教授54人、助教授



吉林大学キャンパス・鼎新楼

52人、講師63人、学部生1142人、大学院生1058人（現在）。このことから、文学部は研究主導型の学部であることがわかる。

佛教大学で「中国語現地研修A」と「中国語現地研修B」に参加した学生は、文学部傘下の国際語学院で学び、教室や寮は前進キャンパス内の友誼会館内にあり、東栄ビルから徒歩15分のところにある。前進キャンパス内やキャンパス周辺には、全国各地の食の味を集めた巨大な食堂が多数存在し、運動場、体育館、プール、各種商店や娯楽施設などがある。まさに都市であり、生活や学習に便利である。

文学部は私に、東栄ビル11階にある単独の研究室を提供してくれた。研究室は広くて明るく、パソコンやプリンター、各種事務用品が揃っていて、至るところで主人の心遣いを感じる。東栄ビルの隣に図書館があり、出入りが便利で、研究環境としては申し分ない。指導教授の劉中樹先生と文学部の皆様のご愛顧を賜り、私は文学部で充実して楽しい一年を過ごした。到着時の歓迎会や外出時の壮行会、各種私宴でのごちそうなどのもてなしだけでなく、学術活動も充実している。最も印象的なのは、次のような活動である。

(1) 「文学院中国現代文学専攻2019年度博士大学院卒業論文答弁（口頭試問）」に招待され、「答弁委員会主席」を務める——これはもちろん大きな栄誉である。9人の博士課程の学生が卒業論文を提出し、6月3日に10時間近くの答弁を行い、これらの論文を見て、コメントを書くために、私は丸10日の時間を使った。私にとって、今回の活動を通じて直接現場で中国の大学の現行の教学と学術状態を観察して体験しただけでなく、実践的な意義のある学術交流の機会を得て、学んだことが多い。学生たちのしっかりした学術基礎とレベルの高い学術答弁は私に深い印象を残した。

(2) 8月17日、吉林大学文学部は「東亜文化與伝播論壇（アジア文化と伝播フォーラム）」(Forum on East Asian Culture and Communication)と題した国際学術討論会を主催し、韓国、日本、米国、香港と中国国内の数か所の大学から30名の学者が招待された。佛教大学からも3人が出席し、つぎのような研究発表を行った。黄当時「古代日本語に見られるオーストロネシア語の要素——金印「漢委奴国王」の読みと意味を中心に」、石崎博志「琉球方言的漢字読音特徴」、李冬木「關於毛沢東思想学院」である。佛教大学

と吉林大学文学院が協定を締結して以来、初めて正式な学術交流活動を行い、今後の学術交流に参考を提供したといえる。

(3) 9月17日、吉田富夫佛敎大学名誉教授は吉林大学の招きに応じて「私と莫言」の学術講座を開き、熱烈な歓迎を受けた。莫言氏は2012年度ノーベル文学賞の受賞者であるが、吉田富夫名誉教授は中国で知名度高い「漢学者」であり、莫言作品の日本語訳の最重要の訳者であり、その話題は吉林大学の学生の濃厚な興味を引き起こし、三百数名の学生が講座を聴講し、しかも講座の後で吉田先生と熱烈に交流、たくさんの問題を提起して、吉田先生は一つ一つ全て答えた。私はこの講座に参加し、補助した。日本の視点から見た「中国と中国文学」が注目されていることを深く感じた。吉林大学学生のまじめな学習態度と旺盛な学習意欲も私に深い印象を残した。

(4) 吉林大学の文学院の要請を受けて、9月の中で、私は吉林大学の文学院で4回魯迅についての学術講座をおこなった。毎回、数十人の文学部の若手教師と大学院生が参加した。ほかの大学の学生も聴講した。所定の時間であれば、1回90分だが、毎回120分以上、最長であれば160分を超えた。毎回の講義の後、学生たちの質問と討論が多かったからだ。講義の内容は主に、「周樹人」（これは魯迅の本名である）がどのように作家「魯迅」になったのか、これが周樹人の日本留学とどのような関系があったのかという2つの問題をめぐって、日本留学時代の周樹人の読書史を通して展開している。この課題は、30年余りに劉柏青教授が吉林大学の中文系で初めて開いたも



吉田富夫佛敎大学名誉教授が吉林大学生と対話、9月17日、「私と莫言」学術講座にて

ので、今でも若い教師と大学院生たちが相変わらずこの課題に関心を持っていることを非常に嬉しく思っている。

「魯迅研究」は吉林大学文学部において、伝統が最も古く、成果が最も豊富な研究の方向である。1950年代から、馮文炳（すなわち廢名、1901-1967）教授が吉林大学で魯迅研究課程を開

設し、今『廃名集』（全六巻、北京大学出版社、2009年）第五巻に収めた『魯迅論』と『魯迅研究』の2つの著書が、当時の授業講義である。劉柏青先生の『魯迅と日本文学』（吉林大学出版社、1985年）は中国において魯迅と日本文学の関係を研究する基礎作と讃えられ、それから魯迅研究を基盤とする中日近現代文学関係の研究を切り開いた。劉中樹先生の『魯迅的文学観』、『〈呐喊〉<彷徨〉芸術論』などの著作もすでに魯迅研究界の經典になった。後継者には張福貴、靳叢林、陳方競、李新宇、王学謙、張叢嶠、李明輝らがおり、「魯迅の文化的選択」、「日本魯迅研究」、「魯迅とニーチェ」、「魯迅の生命意識」などの課題について研究を展開している。現在、大学院における魯迅関連の課程は、すべて専門課程で、48時間と64時間の2種類に分けて、中国現代文学専攻大学院生の授業全体の23%を占める。このような学問的環境の下で、魯迅をめぐる交流は話題がもちろん非常に多い。

（5）高玉秋東北師範大学文学院院长のご厚意に甘えて、同じ長春にある東北師範大学文学院でも招かれて「魯迅」について講演をした。東北師範大学は本科生時代の母校である。40年前の1979年、私は東北師範大学中文系に入学した。私が中国現代文学、特に魯迅に興味を持ったのは、東北で師事してからである。故蔣錫金先生（1915-2003）と孫中田先生は当時の著名な学者であった。今回の訪問では、『孫中田文集』（全10巻、中華書局、2018年）がプレゼントされた。東北師範大学は中国のトップクラスの師範大学の中の名門で、文学院ももちろん強大な中国現代文学と魯迅研究の学者グループを持っている。もっとも印象に残っているのは、入学したばかりの一、二年生たちだ。私のテーマは「魯迅と日本書」である。これは彼らにとって非常に難しいことであるが、それでも百数十名が講演を聞きに来て、大会議室はすべて満席になった。「願你出走半生、回来仍是少年（半生を出て、帰ってきても少年でありますように）」という彼らの歓迎のあいさつは、40年ぶりに母校に帰ってきた私を感動させた。

（6）付言として、12月20日に岳輝吉林大学国際交流学院院长にお招きいただき特別ゲストとして吉林大学国際交流学院の主催する「第19回<雪韻中華>漢語節目大賽」に参加した。これは吉林大学における一大イベントであり、数十カ国の留学生たちが出し物を競演する。「中国語現地研修A」に参

加する佛教大学生チームが現地の体験に基づいて創作した集団トークとダンスを織り交ぜたパフォーマンスは、全会場の喝采を博し、一等賞を獲得した。教員として非常に光栄で嬉しく思った。

3. 各地での訪問、講座、見学

研修期間中に長春から外出して各地に訪問し、見学し、学術討論会に参加し、学術講座に招待され、またこれらの活動を通じて各地の学者達と深く広範な交流を展開することも、この一年の海外研究生生活の重要な構成部分と収穫である。訪問順に並べると、台北、上海、通遼、扎魯特旗、長白山、集安、通化、北京、紹興、青島、済南、曲阜、蘇州である。「海外研修報告書付録 2 研究機構と大学訪問一覧」をご覧ください。

第1回目の長春を離れ、外出して大型会議に参加したのは、長春に到着してちょうど1か月後の5月1日、中央研究院の招きにより、長春から直行便で台北へ飛び、「五四100周年国際学術討論会」(International Conference to Mark the Centennial Anniversary of the May Fourth Movement)に参加した。出発の前日の晩、吉林大学の文学院は私のために公式の歓迎会と夕食会を開いた。5月1日はゴールデンウィークが始まって1日目で、道路が広く発達した長春にもかかわらず深刻な交通渋滞が発生した。長春龍嘉国際空港まで本来であれば50分の道のりが、3時間もかかって、空港のカウンターが閉まる6分前にやっと到着した。

午前に出発して、午後に台北桃園空港に到着して、中央研究院ホテルにチェックインし、近代史研究所の黄自進先生と潘光哲先生の友人を招待する私宴に出席した。日本の年号は「平成」から「令和」に変わった。

中央研究院が主催した「五四100周年国際学術討論会」は、5月2日から4日まで3日間



講演後、復旦大学教授・院生らと。
2019年10月31日、上海・復旦大学中文系にて

たって開かれた大規模な会議で、リストからも分かるように、世界各地から92人の学者が参加した。大陸が五四百年の「低調な処理」を行ったのとは対照的だ。10名の大陸学者が招かれて出席した。日本の大学からの学者は5名で、私のほかに平田昌司教授（京都大）、緒形康教授（神戸大）、黄英哲教授（愛知大）、宮内肇准教授（立命館）がいる。私が報告したテーマは「芳賀矢一〈国民性十論〉と周氏兄弟」である。芳賀矢一（1867-1927）は日本近代国文学研究の開拓者であり、富山房が明治40年に出版した『国民性十論』は、日露戦争後に出版された国民性を論じたベストセラーであり、世の中に強い影響を与えた一冊である。私はこの本と周氏兄弟（魯迅、周作人）の関係を発見して、そして房雪霏さんと一緒にこの本を中国語に翻訳して、吉田富夫名誉教授の「中国語版序」、453条の注釈と導読（解説）をつけて、香港の三聯書店から2018年7月に出版した。私が報告した当日、ある書店が二百冊を会場に持ち込んだところ、完売したということである。「国民性」の問題や周氏兄弟への関心の高さがわかる。また台北秀威資訊科技有限公司は、私が会議に出席した当日に、『魯迅精神史探源：進化與国民』と『魯迅精神史探源：個人 狂人 国民性』の二冊の魯迅に関する専門書を出版し、会場に持ち込んで販売した。私は多くの人にサインした。

会場の違いで、日本人学者の報告は、平田昌司教授と緒形康教授のみであった。前者の題目は「胡老師的「終身大事」——從「遊戲的喜劇」到「社会問題劇的濫觴」」であり、後者の題目は『想像的保守主義——另一種五四啓蒙理念』である。

台北には一週間滞在し、会議参加や学者との交流のほか、胡適記念館、林語堂旧居、陽明山など、多くの場所を見学した。これらは昔からの友人で、中央研究院近代史研究所研究員の潘光哲先生の手配に頼った。出版されて間もない『胡適全集』（潘光哲主編『胡適全集：胡適時論集』8冊と『胡適全集：胡適中文書信集』5冊、台北：中央研究院、2018年12月）を購入したのも大きな収穫だ。

帰路、上海に到着し、上海交通大学中文系の符傑祥教授の招きに応じて、そこで院生達のために講座を行った。吉林大学出身の先輩・張中良教授もわざわざ出席した。講座のタイトルは「從“周樹人”到“魯迅”——以留學時代為

中心」(「〈周樹人〉から〈魯迅〉へ——留学時代を中心に」)で、これはその後各大学と研究機関で20数回の学術講座を行った最初の例である。私が訪問した大学や研究機関、交流の学者、学術講座については、「海外研修報告書付録1、2、3」をご覧ください。



2020年1月7日、中国社会科学院文学研究所「多文化フォーラム」に招待された学術報告

講座と学術報告の対象は、招待機関と要求によって大きく2つに分けられ、1つは青年教師と院生を主として、もう1つは主に本科生である。前者は中国社会科学院文学研究所、北京大学、復旦大学、吉林大学、山東省社会科学院のような研究型の機関と大学であり、後者はモンゴル民族大学、北京師範大学、山東師範大学、紹興文理学院、蘇州大学学部のような学部生を中心とする大学であった。北京第二外国語大学のように、大学生、大学院生、若い教師と一緒に聞く混合型の聴衆もいる。どこにも「外来の聴衆」というものがある。これらの聴衆はいずれも六、七十代が見えるような高齢者で、初めから終わりまで聴講せず、途中で入ったり出たりすることが多く、聞いているうちにいびきをかく人もいる。関係者によれば、彼らは定年退職した教職員で「聴課生」として出席しており、「万が一」に備えているという。事前に条件をつけておく「全過程を録画し、万が一に備えて再生するため」というものもある。

学者の聴衆の所で、私は主に深い専門性の問題と提案に直面して、本科生と院生の所で、私はよく専門の視角に軽視されるいくつかの基本的な問題に直面して、これらの問題は同時に私にもわかりやすい言語で自分の観点をはっきりと表現することを促している。どの学校でも、大学生たちの活発な思想と向学心が印象に残った。山東師範大学での講演後の質疑応答の時間には、本科4年生の王震君の発言に驚いた。彼は魯迅のテキストに詳しいだけでなく、今到着した学術の最前線をも知っていると同時に、中日両国の魯迅の研究の脈絡と相互関係についても、把握している。彼は後に私の『魯迅精神史探源：進化と国民』のために紹介と評論を書いて、『論文衡史』の公衆号「書訊」欄に発表した（2020年5月3日）。つまり、講座や学術報告を通じて、学者や学生たちとのインタラクションの中で、既存の課題に対する私の思考を深め、豊かにし、課題分野の新たな展開を促している。例えば、吉大と復旦学者のインタラクティブを通じて、既成の課題に新しい内容を付け加えたり、北京大学の学者との交流により、上田敏の日本語訳から中国語訳への、アンドレーエフ作品『心』（『思想』）の中国入りのルートを教わったりしている。今年1月7日、中国社会科学院文学研究所の「多文化フォーラム」に招待された学術報告は、完全に過去に口頭と書面で発表したことのない最新の内容である。この報告会は文学研究所の指導者張伯江教授がみずから主宰し、趙京華教授と董炳月教授をコメンテーターにし、外国の文学研究所の学者を含めて60人の学者が参加し、報告後、熱い討論を行い、私にとっては、一つの大きな、素晴らしい刺激であった。報告内容を下敷きにした約3万字の論文を『文学評論』2020年第5期に掲載した。題目は「“狂人”的越境之旅——從周樹人與“狂人”相遇到他的《狂人日記》」（「〈狂人〉の越境の旅——周樹人の「狂人」との出会いから彼の「狂人日記」まで」、日本語版は佛教大学『文学部論集』号に投稿済み）である。これが2012年から『文学評論』に掲載した私の「狂人論」の第三作目である。

各地を訪問する中で、私は中国の民間コレクションと学術活動にも深い印象を持った。2019年10月26日、招きに応じて浙江越生文化伝媒集団を訪問し、同集団の理事長寿林芬女史と同集団が出版した『域外魯迅研究叢刊』について座談会を行い、同時に越生集団の「中国近代文献保護プロジェクト」

も見学した。『中国近代文学文献叢刊』は「小説巻」「散文巻」「詩歌巻」「戯曲巻」「漢訳文学巻」などに分かれており、既に数百巻の復刻版が出ている。近代出版物は紙の劣化がひどく、ほとんどの文献の原本はあまり見られないため、この壮大なプロジェクトは国家レベルの文献保護プロジェクトと言える。

紹興滞在中、魯迅記念館元館長の銭小良氏の紹介で、民間人の張重陽氏の個人のコレクションを見学した。彼の書斎には日本近代漢学者たちの書簡が大量に収蔵されていた。段ボール箱いっぱいの狩野直喜、桑原鑑定、倉石武四郎、諸橋轍次などがあつた。紹興でこれらの超時空の原本を見て、意外な気持ちと喜びを感じる。

2019年11月9日、山東省社会科学院の曹振華研究員の紹介で済南市にある「山東中国文学芸術博物館」を訪れた。建築面積3000メートルの個人博物館であり、オーナーの徐国衛氏は企業家であり、コレクターでもある。収蔵・研究・展示が一体となっており、中国歴代書道篆刻、絵画、早期油絵、中国近現代名人墨跡、中国近現代美術史料、中国新文学版本、作家手跡などの史料などが収蔵されているが、その中でも、中国現、当代文学に関する資料だけで百万件に上る。1909年3月に出版された周氏兄弟の共訳『域外小説集』第1冊の原本を、同館で初めて目にした。当時21冊だけが売れ、ほとんど流通していなかったため、今ではなかなか目にできない珍しい原本だ。個人蔵で見ることができるのも不思議なことだ。

しかし、私が経験した最も圧巻な民間行事は、1月9日に北京魯迅博物館構内にある「魯迅書屋」（個人経営の書店）で趙京華教授（北京第二外国語



「中国近代文献保護プロジェクト」の見学。寿林芬浙江越生文化伝媒集団理事長（右）、銭小良さん（左）、2019年10月26日、紹興にて

大学)が出版した新書『中日間の思想』(北京三聯出版社、2019年7月)のために開かれた書評会である。今回は講評者の一人として書評会に参加した。この行事には公式的な背景は何もなく、世話人の陳言教授(北京社会科学院)が「東方歴史評論」の公衆号に通知を出しただけで、すぐに100数人の市民で会場全体がぎっしりと埋まった。8人の講評者がそれぞれコメントし、著者自身が質疑に応答した。聴衆の質問が多く、会場は盛り上がり、4時間以上も席を立てなかった。「中日間」への関心や民間の思考の活発さが強く感じられる。

中国には「高手在民間」(達者は民間にある)という言葉があるが、以上のような体験を通して、これを実感した。

4. 中国の「魯迅研究」について

自分の専門分野の話になるが、もしも、中国の魯迅研究と日本の魯迅研究はどのように違うかというならば、やはり最大の違いは、魯迅研究は中国では「顕学」であるが、日本では今、研究の「周縁」にあるといえる。——むしろ、「魯迅研究」は中国研究の中でまだとても重要であるが。十五年前に竹内好文集中国語版『近代的超克』(李冬木、趙京華、孫歌訳、北京三聯書店、2005年)が中国で出版された時、ある中国近現代文学を研究の若い学者が、なぜ今さらまた竹内好なのかと不思議に思い、もう一人の魯迅研究者は、竹内好にだまされたと言ったことを覚えている。確かに、2005年12月に上海大学で開かれた百数十名の国内外の学者が参加した「魯迅與竹内好国際討論会」(「魯迅と竹内好国際シンポジウム」)のような盛大な研究行事は、日本では考えられない。

先年の中学国語の教科書から魯迅の「狂人日記」を削除して大いに論争を引き起こしたが、魯迅研究は中国の大学と研究機関における教学と研究の中で依然として極めて重要な位置を占めている。前に紹介した吉林大学の文学院のように、その現代文学は18科目の本科の専門科目を開設して、その中の2科目は「魯迅研究」と「日本の魯迅研究」であり、専攻本科生と現代文学専攻院生の基礎課程である。現在、これらの授業は主に張福貴教授、王学謙教授、李明暉副教授などが担当している。このような「魯迅」偏重の授業

設定は典型例として見るができる。

北京大学中文系は全学の本科生を対象に選択科目「魯迅小説研究」と専門基礎科目「中国現代文学史」を開設した。また、全学向けの共通科目「中国現代文学名著研究」には「魯迅作品精読」も含まれている。現在、魯迅と周作人の研究に従事する学者は、高遠東教授、孔慶東教授、王風副教授、張麗華副教授、李国華講師である。復旦大学中文系は2001年から「文学原典精読」課程を打ち出し、全国に大きな影響を及ぼしている。その中で「魯迅精読」は指定必修科目であるだけでなく、全学の共通科目にもなっている。郜元宝教授、張業松教授、陳思和教授、張斬新教授、金理教授は、いずれも魯迅研究方面の学者である。山東師範大学現代文学カリキュラムの中で、「魯迅」は最も重要な地位にあり、8時間の専門授業（他の作家は最大4時間）のほか、選択科目として「魯迅研究」も開設し、賈振勇教授、李宗剛教授と呂周聚教授などが担当している。呂教授は青島大学文学部に転任し、そこで「魯迅」授業を開設したが、依然として山東師範大学の博士課程の指導教官を兼任している。蘇州大学の学部生は選択科目「魯迅研究」を、修士は専攻科目「魯迅と現代中国文学研究」を、博士は専攻科目「魯迅と現代思想文化研究」を



台北の学者たち。2019年5月3日、台北・林語堂旧居にて

開設し、汪衛東教授は院生の講義を担当している。魯迅の故郷である紹興にある紹興文理学院に至っては、「魯迅」の割合がより目立っており、「魯迅と中国現当代文学学科」専門学科が有するだけでなく、「魯迅研究院」までも設立しており、現在、18人の研究者が、学部生と院生向けの「魯迅研究」「周作人研究」「魯迅と国語授業」「魯迅と二浙文化研究」など20科目を開設している。知り合いの学者には曹禧修教授、卓光平教授、孫海軍副教授などがある。上海交通大学のような理工系大学でさえ、中文系では学部生の「魯迅精読」と大学院生の「魯迅研究」の選択科目を開設しており、張中良教授、符傑祥教授、張全之教授、文学武教授などがこの方面の学者である。

大学だけでなく、研究機関も同じである。例えば、山東社会科学院の曹振華研究員は、責任編集者であると同時に、魯迅研究者でもあり、彼女は『東岳論叢』を主宰し、大量の魯迅研究論文を発表した。佛教大学と学术交流協定を結んでいた中国社会科学院文学研究所に至っては、魯迅研究の重鎮である。1980年代には魯迅研究室が設けられ、張夢陽など著名な魯迅研究者は『1913-1983 魯迅研究學術論著資料集』（全5巻、1985年10月から1989年7月）を編纂しただけでなく、『中国魯迅学通史』（張夢陽著、全6巻、広東教育出版社、2005年1月）も出版した。現在、『魯迅全集』はすべての現代文学専攻修士・博士課程の必読書である。文学所は「中国魯迅研究会」の主管部門でもあり、文学所の董炳月教授は著名な学者で、学会の法人代表と秘書長を兼任している。董先生によると、全国のほとんどすべての大学において「魯迅」特講を担当する教師がおり、毎年、魯迅に関する博士論文が大量に産出しており、北京、上海、広州、アモイに魯迅専門の記念館、博物館があり、「魯迅」と名付けられた専門誌は二種、すなわち『魯迅研究月刊』と『上海魯迅研究』であり、「一人の作家に二種類の専門誌があるのは珍しい」とのことである。

中国の「知網」で検索してみたところ、「魯迅」をテーマにした學術論文は、2019年1月1日から12月31日まで、2321件（8月11日検索）にのぼった。董先生の言うことは嘘ではない。

私が言いたいのは、「魯迅」が中国でこんなに巨大な存在である以上、学术交流の角度から見れば、「魯迅」の中には、まだ中日間の相互理解を増進し、学术交流を深める大きな可能性が潜在している。魯迅は日本で約7年半近く

の留学生生活を過ごし、日本ではじめて『全集』を出版した中国作家であり、戦後竹内好の「魯迅」はまた何代かの人に影響を与え、「魯迅」はかつて日本の学界が中国を透視する一つの窓口と中国との思想的交流プラットフォームとなり、多くの学者がこの窓口とプラットフォームを通じて両国間の深い交流の経路を探索、そして、中国に大きな影響を与えた。現在、「日本の魯迅研究」は、中国の学界の大きな関心の対象になっており、2020年から5年間の国家プロジェクトにも含まれている。私の知る限り、現在、多くの学者が、この分野の研究に加わっている。例えば、張福貴教授（吉林大）、李明輝副教授（同大）、王確教授（東北師範大）、趙京華京教授（北京第二外国語大）、孫歌教授（同大）、董炳月教授（社会科学院）、宋声泉副教授（中国人民大）、姜異新研究員（北京魯迅博物館）、潘世聖教授（華東師範大）、王錫榮（上海交通大）教授、汪衛東教授（蘇州大学）、朱幸純副教授（湖南大学）などがある。その中で、潘世聖教授の近年の研究成果は特に注目されている。私は両国の学者の共同の努力を通じて、20世紀の魯迅は、きっと21世紀に再び中日両国の交流の重要な文化チャンネルになると信じている。

5. 生活体験における「逆カルチャーショック」

「少小離家老大回」（「少小家を離れて、老大にして回る」、唐の詩人賀知章の句）。私は長春で生まれ育ったし、東北師範大学と吉林大学は母校であり、日常生活も母語を使用するため本来ならば、長春での生活はあまり違和感がないはずである。しかし、30年余り離れると中国と長春の変化はすべてあまりにも大きく、私はいつも故郷が異郷に変身する錯覚を覚える。日常生活の中で経験する「カルチャーショック」は——正確には「逆カルチャーショック」と呼ばれるべきだ——いたるところにある。

例えば、1日目に外出で車を運転して（中国を離れる前に、私は中国の運転免許証を取得していた）、帰宅して車を駐車場に止めた次の日に200元の罰金切符を切られた。私はどうして罰則をつけられたのか理解できなかった。するとわかる人が、君が逆向きに車を停めたからだと教えてくれた。自分の駐車向きが他の車両と違うと気づいた。しかし、向きの問題だけで、交通安全に支障が無くても罰金に値するのか。今でも不思議に思っている。

吉林大学のキャンパスに到着した初日、正面に1本の真っ赤で大きな字のスローガンが見えた。「積極的に行動して、黒を掃除し悪を除去する人民戦争せよ。」という「戦争」なのかさっぱり分からないので、人に「黒」とは、「悪」って何と尋ねた。「黒」は「黒社会」(マフィア)であり、「悪」は「悪勢力」であることがわかったが、大学にも「黒社会」と「悪勢力」があるのであるかの答え曰く、幼稚園にもこんなスローガンがあるよと。

最近では Wechat (中国名「微信」) が米中対抗でも問題になっている。これまでは国内の家族や友人と連絡を取る以外にあまり使っていなかったが、中国の日常生活では微信がないとほとんど生活できない。ほとんどのビジネスサービス、豆腐一丁の注文からタクシー乗車、高速鉄道ないし飛行機のチケットまで、すべて「微信決済」でするからである。携帯に搭載する微信決済がないと、現実的には一歩も歩けない。現金や財布が日常生活から消えたのは、かつては想像もできなかったことである。——そのおかげで財布を盗む泥棒はいなくなる。微信決済は、加入者の銀行情報を結びつけなければならないため、携帯電話番号から登録情報まですべて实名制である。逆に言えば、すべての個人情報、微信事業者の騰訊公司に入っているが、中国の情報法によると、これは国家運営管理に個人情報が盛り込まれていることを意



お別れのご挨拶。写真の右より康永剛文學院書記、張福貴資深教授、張希吉林大學長、劉中樹資深教授、李冬木、徐正考文學院長、張叢暉教授。2020年4月3日、吉林大学文學院にて

味する。当初、私は「微信決済」に抵抗感を持っていたが、これはライフスタイルであり、受け入れるしかなかった。

2月13日、某都市から高鉄に乗って長春に戻った。その頃すでに新型コロナウイルス感染症は蔓延し、各地で厳しい統制が行われていた。携帯電話を通じて、高鉄の切符を買ったばかりで、長春側からすぐにメールが届いて、長春に到着後、2週間は自主的に隔離しなければならないという知らせであった。長春についた直後、コミュニティ、病院、派出所の三軒は前後して「お知らせ」電話をかけてきた。2週間の隔離を実行し、微信のコミュニティ群に加入し、毎日午前と午後2回、体温記録を報告せよという協力要請である。このような厳格な管理は、携帯によって実現されている。これには適応できず、拒否感が強いが、携帯によって各種の安全情報と生活サービスを得られるのも事実である。これは情報化社会と管理化社会の二重矛盾かもしれない。監視されているが、WeChatの地図を通じて随時に感染者の位置と情報を得ることできる。また、隔離期間中の生活用品の購入などはすべて携帯を通じておこない、デパートやスーパーに行くよりも便利である。

最大の不適感を持つのは、やはりインターネットの制限である。2019年には「30周年」、「70周年」、「100周年」の3つの敏感な周年を迎えるため、インターネットの制限は非常に厳しくこれまで使ってきた仏教大学の電子メールでは日本国内との連絡も全くできず、中国以外のインターネットにもアクセスできない。中国内の旧『人民日報』の資料も「敏感な時期」のため検索できないほどだ。作業中の「(日本)毛沢東思想学院研究」という課題は、中国国内でかかわる『人民日報』資料を調達するには便利だと思ったためにできず、この課題は棚上げにされた。

私は自分を新しい生活環境に適応させようと努力しており、友人の配慮と助けのおかげで、逆カルチャーショックも大いに緩和され、次第に慣れ始めたが、まだまだ慣れないものが残っているうちに海外研修生活は終焉を迎える。最後の2か月余りは、ほとんどが隔離された状態で過ごしたため、離れる前にやるべきことがまだたくさんあったが、できなかった。この期間中、「狂人」的越境之旅」という論文を完成させる以外、多くの時間はどのようにして復路にたどり着くのかについて相談と計画、そして1枚の航空券を獲

得するために奮闘する。しかし、武漢の悲惨さと比べると、これらは何でもなくて、世界の大多数の人は同じような生活を経験している。

ただ時間が経つのは早いと感じる。出発した時はまだ「平成」だったのが、帰りではすでに「令和」となり、私は滞在中に祖父になった。4月7日に関空に着陸した際、初孫の憬君はもう生後半年、初対面の時は7ヵ月になった頃だ。初めて日本に来たのは32年前、あっという間に白髪になってしまった。時間が経つのは早い！

海外研修報告書付録1 研究発表と講演一覧

芳賀矢一《国民性十論》与周氏兄弟（5月3日，発表）

2019年5月24日，台北・中央研究院「五四運動100週年」國際學術研討會
從“周樹人”到“魯迅”——以留學時代為中心（講演）

2019年5月8日，上海・上海交通大學文學院
從“周樹人”到“魯迅”——以留學時代為中心（講演）

2019年6月14日，通遼・內蒙古民族大學文學院
關於毛澤東思想學院（8月17日，発表）

2019年8月16-18日，長春・吉林大學“東亞文化与傳播論壇”
從“周樹人”到“魯迅”——以留學時代為中心（講演）

2019年9月5日，長春・吉林大學文學院“諸子百家”
一本書的百年旅行——以洪江保訳《支那人氣質》与魯迅為中心

2019年9月12日，長春・吉林大學文學院“諸子百家”
在留學生周樹人周辺（講演）

2019年9月19日，長春・吉林大學文學院“諸子百家”
“狂人”之誕生——關於《狂人日記》裏的“喫人”和“狂人”（講演）

2019年9月24日，長春・吉林大學文學院“諸子百家”
吉田富夫《我與莫言》（翻譯，李冬木）（講演）

2019年9月26日，長春・吉林大學哲學社會科學“名家講座”
魯迅与日本書（講演）

2019年10月10日，北京・北京第二外國語學院中文系
一本書的百年旅行——以洪江保訳《支那人氣質》与魯迅為中心

2019年10月11日，北京・北京第二外國語學院中文系
魯迅与日本書（講演）

2019年10月16日，長春・東北師範大學文學院
魯迅与日本書（講演）

2019年10月21日，上海・復旦大學中文系
魯迅与日本書（講演）

2019年10月22日，上海・華東師範大學外語系
從“天演”到“進化”（講演）

2020年10月23日，上海・復旦大學中文系
在留學生周樹人周辺（講演）

2019年10月24日，上海・復旦大學中文系
明治時代“國民性”話語与中国——以《國民性十論》為中心（講演）

2019年10月25日，上海・華東師範大學外語系
魯迅与日本書（講演）

2019年10月28日，紹興・紹興文理學院文學院

“狂人之誕生”（講演）

2019年10月31日，上海・復旦大学中文系

明治時代“国民性”話語与中国——以《支那人氣質》和《国民性十論》为中心（講演）

2019年11月6日，青島・青島大学文学院

從“周樹人”到“魯迅”——以留學時代为中心（講演）

2019年11月9日，濟南・山東社会科学院文化研究所

“中国文化70年”全国學術討論會

“魯迅”之誕生——求學期周樹人的閱讀史（講演）

2019年11月9日，濟南・山東師範大学文学院

“魯迅”之誕生——求學期周樹人的閱讀史（講演）

2019年11月12日，蘇州・蘇州大学文学院

從“周樹人”到“魯迅”——以留學時代为中心（講演）

2019年11月14日，中国魯迅学会、蘇州大学文学院

“中国魯迅学会成立40周年紀念大会紀念年会”，蘇州・蘇州南林酒店

“魯迅”之誕生——求學期周樹人的閱讀史（講演）

2019年11月18日，北京・北京大学中文系

狂人の越境之旅——從周樹人与狂人相遇到他的《狂人日記》（講演）

2019年1月7日，北京，中国社会科学院文学研究所

關於趙京華著《中日間的思想》（コメンテーター）

2020年1月9日，北京・《東方歷史評論》

東亞同時代史：中日之間的“思想連鎖”學術討論會

* なお、予定だったが、コロナウィルスのため中止した講演が三ヶ所ある。

遼寧師範大学文学院（3月16日・大連）

中国海洋大学文学院（3月19日・青島）

廣西桂林師範大学（3月23日・桂林）

海外研修報告書付録2 研究機構と大学訪問一覧

- 2019年4月1日—2020年4月6日、長春・吉林大学文学院にて一年間海外研修。公私ともにお世話になった指導教授である劉中樹先生をはじめ、徐正考院長、康永剛書記、張福貴資深教授、岳輝副院長、張叢嶸副院長、韓文淑教授、李明輝副教授、李冬梅副教授、田鵬主任らとの人的交流を深めたとともに、充実な研修生活を送りました。
- 2019年5月1-7日、台北・中央研究院招待訪問
「五四運動100週年」國際學術研討會參加・研究発表・潘光哲研究員、黃自進研究員らと交流・胡適記念館、林語堂記念館、陽明山など見学
- 2019年5月8日、上海・上海交通大学文学院招待訪問
講演・張中良教授、符傑祥教授らと交流。
- 2019年6月14日、通遼・內蒙古民族大学文学院招待訪問(吉林大学田鵬主任が同行)、講演・郝青雲院長、王金雙主任、李明軍教授、王妍教授らと交流
- 2019年10月10-11日、北京・北京第二外國語学院文化與傳播学院招待訪問・講演趙京華教授、李林榮教授、郭剛講師らと交流。10日午後、魯迅研究者である張夢陽氏の自宅訪問、懇談。晚7:00、北京戲曲評論協會會長靳飛氏らと懇談。
- 2019年10月12日、北京・中国社会科学院文学研究所 訪問(趙京華教授が同行)、張伯江書記、董炳月研究員、李超處長、范智紅主任編輯らと交流
- 2019年10月16日、長春・東北師範大学文学院招待訪問・講演
高玉秋院長、吳景明教授、徐強教授、韓小莉教授、劉研教授らと交流
- 2019年10月18-31日滞在、上海・復旦大学中文系招待訪問・講演、陳引馳主任、郜元寶教授、張葉松教授、朱剛教授、吳兆民教授、陳思和図書館長らと交流
- 2019年10月19日、上海・上海魯迅記念館訪問
- 2019年10月22、25日、上海・華東師範大学外語系招待訪問・講演、潘世聖教授及び大学院生らと交流
- 2019年10月26日、紹興・浙江省越生文化創業産業園區招待訪問、「中国近代文献保護工程」編集委員として、寿林芬董事長らと懇談
- 2019年10月27日、紹興・魯迅記念館招待訪問
錢小良(紹興名人故居管理处)、沈剛副教授(文理学院)らと交流
- 2019年10月28日、紹興・紹興文理学院人文学院招待訪問・講演、寿永明校長、曹禧修教授、沈剛副教授、卓光平副教授、孫海軍講師らと交流
- 2019年11月6-9日滞在、青島・青島大学文学院招待訪問・講演、劉東方文学院院长、呂周聚教授、李玉明教授、劉群副教授らと交流
- 2019年11月9日、濟南・山东社会科学院文化研究所招待訪問・講演・張偉所長らと懇談
- 2019年11月9日、濟南・山东师范大学文学院招待訪問・講演、賈振勇教授、顧廣梅教授、劉子凌講師、葉誠生教授(山東大)、史建國副教授(山東大)、曹振華研究員(山东社会科学院)らと懇談

- 2019年11月9日、済南・山東中国文学芸術博物館招待訪問・徐国衛館長らと懇談
- 2019年11月10日、済南・『東岳論叢』編集部訪問、責任編集者である曹振華研究員らと懇談
- 2019年11月11日、曲阜・曲阜師範大学文学院・『齊魯学刊』編集部招待訪問（曹振華研究員、謝慧聰大学院生同行）、張玉璞院長・編輯長、趙歌東教授、張瑞英教授、朱獻貞教授らと交流。孔子廟見学
- 2019年11月12日、蘇州・蘇州大学文学院招待訪問・講演・汪衛東教授らと懇談
- 2019年11月16-19日滞在、北京・北京大学中文系招待訪問・講演（18日）、高遠東教授、吳曉東教授、王風副教授、張麗華副教授、李國華副教授らと交流
- 2019年1月7日、北京、中国社会科学院文学研究所招待訪問・講演、張伯江書記・劉躍進所長をはじめとする究所の多数研究者と懇談・交流
- 2020年1月9日、北京・魯迅博物館招待訪問・《東方歴史評論》論壇にて、趙京華教授の著書である『中日間的思想』についてコメントする。北京の学者多数と交流

海外研修報告書付録3 海外研修期間中、交流していた学者一覧

(今現在、魯迅研究・中国現當代文学・中日近代文学という分野において活躍している学者の一部であるが、代表的な研究者が多数含まれている。地域別)

長春市

吉林大学文学院

徐正考 院長、教授、長江学者、言語学。2017年12月、団長として佛教大学訪問。50代

劉中樹 資深教授、中国現代文学。85歳の高齢だが、現役、影響力が絶大

張福貴 資深教授、長江学者、魯迅・中国現代文学・中日近代文学。同分野の全国的重鎮。60代

岳輝 文学院副院長、國際言語学院院长、言語学。吉林大学留学生言語教育関係の最高責任者。2017年12月、副団長として佛教大学訪問。50代

王学謙 教授、魯迅・中国現代文学。50代

張叢皞 教授、文学院副院長、中国現代文学・旧満州作家。2017年4月から9月まで佛教大学客員研究員。30代

韓文淑 教授、中国現當代文学。留学生大学院責任者、佛教大学中国語現地研修授業担当。30代

李冬梅 副教授、中国現當代文学。留学生教務主任、佛教大学中国語現地研修授業担当。40代

李明輝 副教授、魯迅・中日近代文学・日本魯迅研究史。30代

東北師範大学文学院

王確 資深教授、中国現代文学・明治美学・旧満州画展。60代。2011年4月から2012年3月まで、國際日本文化研究センター外国人研究員

高玉秋 院長、教授、中国現當代文学。50代

吳景明 教授、中国現當代文学。40代

徐強 教授、中国現當代文学。40代

韓小莉 教授、教授、中国現當代文学。40代

刘研 教授、教授、中国現當代文学・比較文学。40代

孫洛丹 副教授、黃遵憲・中日近代文学。30代

北京市

中国社会科学院文学研究所

張伯江 書記、研究員、言語学、中日關係研究重視、『文学評論』編集長。2018年12月、団長として佛教大学訪問。50代

劉躍進 所長、研究員、中国古典文学、中日關係研究重視、『文学遺産』編集長。佛教大学・中国社会科学院文学研究所共同主催<國際學術シンポジウム、グローバル時代における人文学研究諸相>(2017年5月27日・北京)と同<國際シンポジウムⅡ(京都会議)>(同12月27日・京都)にて

基調講演。60代

- 董炳月 研究員、魯迅・中日近代文学関係、中国魯迅研究会秘書長。当分野の著名学者、東京大学出身、佛教大学を何度も訪問。50代
- 趙稀方 研究員、海外華文文学・翻訳文学。中国現當代文学研究室主任、佛教大学・中国社会科学院文学研究所共同主催の〈国際学術シンポジウム〉にて発表。50代
- 顔淑蘭 助理研究員、中日近代文学関係。早稲田大学出身、通訳として佛教大学・中国社会科学院文学研究所共同主催の〈国際学術シンポジウム〉参加。30代
- 范智紅 研究員、中国現代文学。『文学評論』主任編輯者として、中日近代文学関係の論文を多数掲載させた。50代
- 張夢陽 元研究員、魯迅・中国現代文学。定年だったが、魯迅研究の重鎮として活躍中。70代

北京第二外国語大学文化與伝播学院

- 趙京華 教授、中日近代思想文化。当分野の著名学者、一橋大学出身。佛教大学を何度も訪問。60代
- 李林荣 教授、魯迅・中国現當代文学。40代
- 郭剛 講師、中国現代文学・翻訳文学。40代

中国伝媒大学文学院

- 劉春勇 教授、魯迅・中国現代文学。40代

北京魯迅博物館

- 姜異新 研究員、魯迅・中国現代文学。『魯迅研究月刊』編集委員。40代

中国人民大学文学院

- 孫郁 教授、魯迅・中国現代文学。中国魯迅研究会会長、魯迅研究の重鎮。60代
- 宋聲泉 副教授、魯迅・中国近現代文学。30代

首都師範大学日本語系

- 王成 教授、日本近代文学・中日近代文学比較研究。立教大学出身、2014年4月から2015年3月まで、国際日本文化研究センター外国人研究員。50代

北京師範大学外国語言文学学院日文史

- 王志松 教授、日本近代文学・中日近代文学比較研究。50代

北京外国語大学日本研究センター

- 秦剛 教授、中日近代文化関係・映像。2013年4月から2014年3月まで、国際日本文化研究センター外国人研究員。50代

北京語言大学

周 閱 教授、東アジア文学と文化関係・日本中国学。2016年4月から
2017年3月まで、国際日本文化研究センター外国人研究員。50代

北京大学中文系

高遠東 教授、魯迅・中国現代文学。50代
呉曉東 教授、魯迅・中国現代文学。50代
王 風 副教授、魯迅・中国現代文学。50代
張麗華 副教授、魯迅・中国現代文学。40代
李国華 副教授、魯迅・中国現代文学。30代
周 旻 在学中の博士、中日近代文学・翻訳。20代。2018年9月から2019年4
月まで、京都大学文学部一年留学

上海市

復旦大学中文系

陳引馳 主任、教授、長江学者、中国古典文学・佛教学。50代
鄒元寶 教授、長江学者、魯迅・中国現代文学。50代
張葉松 教授、魯迅・中国現代文学。神戸大学文学部客員教授。50代

同、図書館

陳思和 館長、教授、魯迅・魯迅・中国現當代文学。当分野の重鎮。60代

同、外文学院

王升遠 教授、日本近代文学・中日近代文学。40代

華東師範大学外語学院

潘世聖 教授、魯迅・日本近代文学・中日近代文学。50代。九州大学出身。
2017年4月から2018年3月まで、国際日本文化研究センター外国人研
究員

上海交通大学文学院

符傑祥 教授、魯迅・中国現代文学。40代
張忠良 教授、魯迅・中国現代文学・中日近代文学。60代

南京市

南京師範大学文学院

譚桂林 教授、長江学者、魯迅・中国現代文学・佛教学。中国魯迅研究会副会
長、2016年9月から2017年2月まで創価大学客員研究員。60代

同、東語系

林敏潔 主任、教授、魯迅・中日近代文学。慶応大学出身。50代

蘇州市

蘇州大学文学院

汪衛東 教授、図書館長、魯迅・中国現代文学。50代

張学謙 講師、中国現代文学。30代。

紹興市

紹興文理学院人文学院

曹禧修 教授、魯迅・中国現代文学。50代

沈剛 副教授、魯迅・中国文化・紹興。50代

卓光平 副教授、魯迅・中国現代文学。30代

孫海軍 講師、魯迅・中国現代文学。30代

魯迅紀念館

錢小良 紹興名人故居管理处・元魯迅紀念館長、魯迅・紹興文化。50代

青島市

青島大学文学院

呂周聚 教授、魯迅・中国現代文学。50代

李玉明 教授、魯迅・中国現當代文学。60代

劉群 副教授、中国現代文学・比較文学。40代

中国海洋大学文学院

徐妍 教授、元院長、魯迅・中国現代文学・児童文学。50代

青島科技術大学外国語学

蔡鳴雁 副教授、日本近代文学・中日近代文学關係。30代

濟南市

山東師範大学文学院

賈振勇 教授、魯迅・中国現代文学、50代

顧広梅 教授、中国現當代文学。40代

劉子凌 講師、中国現當代文学・戯曲。30代

謝慧聰 在学中の博士、魯迅・中国現代文学。30代

山東大学文学院

葉誠生 教授、中国現代文学。50代

史建国 副教授、魯迅・中国現代文学。30代

同、外国語学院

邢永鳳 教授、中日文化交流史 日本思想史。40代

山東社会科学院

曹振華 研究員、魯迅・中日近代関係、『東岳論叢』編集者として、中日近代文学関係の論文を多数掲載させた。50代

曲阜師範大学文学院

張玉璞 教授、中国古典文学・宋文学、『齊魯学刊』編集長、書道家。50代

張瑞英 教授、中国現當代文学・莫言。50代

趙歌東 教授、魯迅・中国現代文学。50代

西安市

西北大学文学院

姜彩燕 教授 魯迅・中国現代文学。40代

桂林市

广西师范大学文学院

蔣建国 教授 魯迅・中日近代文学関係・日本魯迅学史。40代

通遼市

内蒙古民族大学文学院

郝青雲 院長・教授、元明清文学・北方民族、50代

李明軍 教授、魯迅・中日近代文学関係。40代

王 妍 教授、中國當代文学、40代

台北市

中央研究院近代歴史研究所

潘光哲 研究員 中国近代史・中日近代交流史。国際日本文化研究センター外国人研究員。50代

黃自進 研究員 中国近代史・中日近代交流史・蔣介石。国際日本文化研究センター外国人研究員。60代

20 年 月 日

佛 教 大 学 長 殿

2019年度 教育職員研修報告書

氏 名	李 冬木	印 所 属	中国学科	職 名	教授
研 修 種 別	海 外 ・ 国 内 ・ 一 般		長 期 ・ 短 期		
研 修 期 間	2019 年 04 月 01 日 ～ 2020 年 03 月 31 日				
	※海外研修者 出発・帰国日 2019年04月01日～2020年04月07日 (371日間)				
研 修 先	国 名	中国	都市名	長春市	
	機関名	吉林大学文学院			
研 修 課 題	魯迅と明治日本				
研 修 成 果	研究課題のまとめ、大学・研究機構訪問、人的交流、発表・講演・出版				
<p>「魯迅と明治日本」という研究課題をめぐって、一年間、吉林大学文学院に提供して下さった研究室を拠点にして、23箇所の大学・研究機構を訪問し、吉林大学の諸先生を始めとする80名近い研究者と交流を行い、27回の研究発表と講演をしていた上、自分の研究をまとめた著書の出版と研究雑誌への投稿を実現しており、実りのある海外研修生活を過ごした。具体的に、「海外研修報告書付録1、2、3」をご参照ください。</p> <p>海外研修報告書 別紙1 研究発表と講演一覧 海外研修報告書 別紙2 研究機構と大学訪問一覧 海外研修報告書 別紙3 海外研修期間中、交流していた学者一覧</p> <p>著書の出版 李冬木著『魯迅精神史探源 進化與国民』、台北：秀威資訊科技股份有限公司、2019年5月1日、374頁 李冬木著『魯迅精神史探源 個人・狂人・国民性』、同上、322頁</p> <p>掲載予定の研究論文： 「狂人」的越境之旅——從周樹人與「狂人」相遇到他的〈狂人日記〉 北京・中国社会科学院文学研究所『文学評論』、2020年中掲載予定</p>					
成果刊行予定	上欄「掲載予定の研究論文」参照				

※成果刊行予定には、「論題名」「掲載誌名」および掲載年度をご記入ください。

※この用紙で得られた個人情報は、教員研修報告書として利用し、それ以外の目的には利用しません。

学部長

印

今後の課題

「魯迅と明治日本」という課題の研究をさらに深めて展開したいと思う。具体的に、留学生周樹人（後の魯迅）とその周辺に存在する高山樗牛、姉崎正治、登張竹風、齋藤信策、桑木巖翼、イブセンとロシア文学、そして明治佛教の関連事実を発掘し、当課題に潜んでいる中日近代に思想・文化の交流実態とその意義を明らかにする。

その他参考となる事項

「魯迅」は中国の大学教育と研究機構の中において、重要な位置を占めており、ほとんどの大学の文学院または中文系が「魯迅」という科目を開設する一方、中国魯迅研究会や魯迅博物館・記念館などのような「魯迅」の名前で命名する研究会、研究機構及び施設がたくさんある。中国現代文学といえば、まず「魯迅」というほどである。1918年に小説「狂人日記」発表をきっかけに、「魯迅」という作家が誕生したわけで、その以後のことがよく知られているが、「魯迅」になった以前の本名「周樹人」の時期に知られていない多くの空白、とりわけ周樹人の日本留学期の閲読史に空白がたくさ残されている。研究者たちが「魯迅と明治日本」という課題に強い関心を持つのはこのためであろうか。

